

「みんなで生きる町」(六上第五单元)

青山学院大学講師 早坂 五郎

一 なぜ、この教材で「個に応じた指導」を行うのか
平成十七年度版で新しく教材化された「みんなで生きる町」を、四月二十一日、横浜市立俣野小学校で授業をさせていただいた。

「個に応じた指導」を行うにあたって、本教材を用いた理由は、次の二点である。

「身の回りの状況」への認識は、児童一人一人で大きく違う。本教材は、将来、児童に期待される「環境を創造する担い手」としての資質を培うという大切な内容を押さえていると考えたからである。児童は、資料「多くの人が使えるように」を読むことで、新しい視点に立って自分なりに「身の回りの状況」を見直し、自分の考えをもつことになる。

二 目としては、児童の関心・意欲・態度にかかわる教師の適切な「個に応じた指導」により、調べ、発表し、提案する力を確かに身につけることができるのである。

常々感じていた。昨年から国語の音声言語指導で、児童の表現力を伸ばす授業の改善に取り組んでおり、徐々に効果を上げている。」と語り、これからが楽しみだとしている。また六年一組担任の大橋恵子先生は、これまでの学習を振り返り、「児童は調べ学習を好み、調べるとそれを話したくなってくる。そこで、話す順序は大切なことから、文章でいえば、大見出しにあたる内容から小見出しへ、つまり、印象深い順に話すことにしている。」と述べた。

三「個に応じた指導」の実践

(1) 導入―「つかむ」段階

・一斉指導での「個に応じた指導」

学年の初めにあたり、皆が声を出して授業に参加してクラスへの帰属意識をもたせることが重要である。そのために次の発問をした。

発問…「ユニバーサルデザインの考えとはどのようなことですか。」(発問を板書する)

これは、ここまでに学習している内容である。授業の導入として、「発声することにより安定した帰属意識をもたせる」ために、前に出てそれぞれの児童に答えさせたいということが、授業者の意図である。

中には、挙手できなかった児童や、前に出ることをためらう児童がいるので、「隣の子と相談したり教科書で調べたりしてもいいです。」と声をかけた。

二 単元の指導計画 (総時数十三時間)

- (1) 教材文を読む。(一時間)
- (2) 学習の見通しを立てる。(一時間)
- (3) 「ユニバーサルデザイン」の視点に立って、グループや個人で調べる。(三時間)
- (4) 発表と話し合いをする。(四時間)
- (5) 文章にまとめる。(四時間)

本校児童の実態について校長の梅澤敏武先生は、「発言や発表をするときに自分の思いをつまく伝えられないことが多い。体育や音楽の表現を見ても、もっと力があるはずだと

この後、二十八名全員が挙手。黒板の前に並び、そこで一人一人発言をさせた。一歩前に出て、「話していいですか。」と言つと、ほかの児童が「言つていいです。」と応じる。一人一人が、教科書77ページに書かれている「できるだけ多くの、いろいろな条件の人が使える物を作りましょう、というのがわたしの提案です。このような物作りの考え方を、ユニバーサルデザインといいます。」の部分を見たり読んだりして発表できた。

そこで、まだ発言していない児童に対して負荷をかけるために、新たな指示を出した。
「今まで話した人は、皆よく答えています。これから話す人は、教科書を見ないで自分の言葉で話したら、もっとすばらしいね。」

児童は、自分の番が来るまでに教科書を見て、ユニバーサルデザインの考えを覚えようとし始めた。ある児童は、教科書を見ることなく、全文を要約して発言していた。一人一人が、その子なりの言い方で次々と発言していく。

ほかの児童は、教科書を丁寧にゆくり読み、うなずいていた。これは、それぞれの児童にとって、いわば、自分に合わせた学習といえるだろう。

二十八名全員が発言が終わるまで六分間。わずかな時間であったが、児童は発言し、成就感を味わっていたようだ。皆が、ユニバーサルデザインの考えについて二十八回聞いたことになる。「キーワードを明確に聞き合った」ことが最も

大切なことなのである。

「聞き合う」ことは、「話し合う」「ことの基礎であり、コミュニケーションを行うためには必須である。」「聞き合う学習」を数多く取り入れることは、一人一人がわかるための時間を作るといって「個に応じた学習」となり、授業改善となるのである。

次の「は」は、本教材のキーワードである。
共に・みんなで・多くの人が・自分たち・すべての人・
だれもが・一人一人・使う人・いろいろな人

ユニバーサルデザイン
身の回りの施設や物

よりよい暮らしのために提案

学習にとりつきにくい児童や遅れがちな児童には、特に
のキーワードを強く意識させたい。そのために、キーワードをカードに書かせた。児童は、カードに書くことによって学習の視点を定めることができる。

カードには、一枚に一つのキーワードを書かせた。「共に」(単元名)、「みんなで」(教材名)、「多くの人が」(資料名)。この三つのキーワードは、それぞれ単元、教材、資料の題名の一部に使われている。これら三つのキーワードをもとにして、「題名読み」を指導すると、児童が「身の回りの状況」をどのくらい把握しているかを知ることができる。いわば意識調査をすることになるので、将来の「環境の創造の担い

手」育成への手がかりをつかむことにつながる。

ユニバーサルデザインについて説明するときに、「改善」という語を使って話した児童に対して、それを聞いていた児童が、「今の話の内容のキーワードは『改善』です。」と手を挙げていた。言語の指導が重要視される今、「キーワードを聞き取る」「カードを用いてキーワードを使うこと」が、高学年での「個に応じた指導」の道を拓くのではないかと感じた。

(2) 展開「ためす」段階

・グループでの「個に応じた指導」

グループで行う「個に応じた指導」には、次のようなものが考えられる。

興味・関心によるコース

問題意識によるコース

習熟度別コース

達成度別コース・能力度別コース

今回扱った「は」のコースは、自分に密接なかわりをもつ事柄への取材活動を行ったが、これらの学習により児童の意欲は大いに喚起された。

取材に先立ち、ユニバーサルデザインという新しい視点で社会を見直すことを中心的な課題ととらえて、児童の意向をくみつつ「個に応じた指導」を行うこととした。次は、それぞれ

れのグループに対するアドバイスと活動の実際である。

ア 祖父母へのインタビュー (のコース)

大好きなおじいちゃん、おばあちゃんに、「社会がどうなっていたらよいと思いますが。」とインタビューをした。児童の発表は、人間味豊かなものとなった。

イ スーパーマーケットの取材 (のコース)

デジタルカメラ五台を使用させて、家の人が毎日のように利用する施設を撮影し、その見直しを考えた。デジタルカメラのような視聴覚機器を用いての発表には、聞き手を引きつける力があつた。説得力のある発表となった。

ウ 介護施設へのアプローチ (のコース)

祖父母が実際にお世話になっている介護施設にうかがうことにした。施設図をいただいたり、写真を撮ったり、介護士さんにインタビューをした。祖父母に理解をとり、施設所長にも取材した。

エ 自分の家で家族で話し合った。

家の人から、「。。。もそこまで大きくなったのか。」とほめられた。

オ 町をユニバーサルデザインの視点で見直したこと。
「身の回りの状況」の認識を深めた。

(3) 評価「まとめる」段階

・グループでの「個に応じた指導」

本事例のように、調べる、発表する、提案する学習を順に

行うことには意味がある。授業者は、「個に応じた指導」の立場から、「発表したら自分の考えを提案する場を設ける形」を、指導計画(4)で四時間、毎回行うこととした。そこでは発表し終わってから提案するという形にこだわらず、児童の学習の進み具合、達成具合に応じて、徐々に身の回りの環境を創造することに目を向けさせることを意図した。遅れがちな児童には、「。。。のために」と人物設定をして老人や赤ちゃんなどの写真を見せ、具体的に考えられるようにした後、次のような発問をした。

発問：「あなたはどのようなユニバーサルデザインの施設や物を考え出しましたか。グループで話し合いましょう。」

・ 祖母のために――新聞受けなど、低い取り出し口。
・ 客のために――カートが店内を自動で回る。
・ おなかの大きな人のために――階段の一段の高さを低くし、段の幅を広くする。
・ レストランの入口――風のカーテンにする。
・ トイレの音――違う音が出て気持ちをよくする。
本実践を終えて、「個に応じた指導」では、次の四点が大切であると思われた

皆が同じ立場に立つて、スタートする。(スタート同一) 自分の学ぶコースを選ぶ。(選択の自由) 学んだことを共有する。(認め合う発表の場) 評価する。(何がわかり、何がわからなかったかを検証)